

## 文学部—図学部—式学部

文学部行動科学科 吉村浩一

“文学部”以外は聞き慣れない言葉でしょう。それもそのはず、あとの二つは、私の造語です。かくいう私は文学部に属していますが、これからお話しする物語の中では、“図学部心理学科”の一員として登場します。

数年前、私どもの心理学研究室に集中講義に来られた先生が、忙しい講義日程のあいまに、「工学部での講演を頼まれているから」と総合情報処理センターのある小立野キャンパスに出向かれた。その方は、もともと工学部系の学部のご出身で、現在もその分野での基礎を活かして、知覚システム論を専門とされている。明るく、その方との雑談の中で私は、「うちの集中講義と工学部での講演とでは話を変えるのですか」とお聞きしたところ、「同じ話なのですが、話し方を変えます。工学部で話をするときには、“式”を出せば安心してもらえます」とのこと。こう言われたとき、私は、なるほどという気持ちと同時に、意外でもありました。根っからの“図学部”学徒である私は、たとえ工学部の人たちといえども、“難解な式”で語られるよりも、誰もが理解できる“文”で話される方が助かるに決まっていると思いついていました。それが何と、文章を連ねて語られると頭の中に霧がかかってきて、式が現れると霧晴れわたるといふのだから、ちょっとした驚きでした。彼らは根っからの“式学部”人間なのだ。

このような印象を抱いたとき、私はふと、それぞれの学問での論の展開のための道具建ての違いに思いを巡らせていました。一方に“式学部”があるとすれば、その対極には何学部が来るのだろうか。心理学は、さしづめどのあたりに位置する学問なのだろうか。

心理学では、実験を行い、人間の心のはたらきの法則的理解・説明を目指す努力を行っていて、日頃から数値データの山の中で右往左往しています。その意味から、われわれといえども数式と無縁ではありません。しかし、われわれの扱うデータは、グラフのような“図”に集約すると最も適切に表現できます。あるいは、実験計画を立てるときにもいくつかの要因を配置しますが、それも二次元、三次元の図的なものとして捉えることができます。そして何よりも、実験により主張したいことのエッセンスは、図に描き表して訴えかけるのが一番なのです。これが、私どもを“図学部心理学科”と見なすゆえんです。

それでは、“式学部”の対極には何学部がくるのでしょうか。学問の歴史・伝統から考えれば、文字で文を作り、さらに文章を連ねて論理を構築する“文”学部ということになりそうです。そしてその代表格には、哲学あたりがくるのでしょうか。一般の人たちにとっての親しみ易さからいえば、日常誰もが使う“文”を道具建てに用いる“文学部”の右に出るものはないはずです。ところが、そのこ

とが災いして、同じ言葉が、日常語と学問用語で交絡を起こしたり使用者ごとに意味のずれを生じてしまうという厄介な問題に悩まされ、この学部では絡まった糸をほぐす作業にかなりのエネルギーを費やしています。

手前味噌で恐縮ですが、図学部ではいま、新しい展開が興りつつあります。それは、スタティックな図からダイナミックな図へのバージョン・アップです。私の勝手な分類では、神経生理学という学問も図学部的性格を強く有しており、本学部の学科として喜んで迎えたい研究分野の一つです。この領域で生み出される知見は、周辺科学にも強い影響を及ぼしており、私ども心理学の研究や授業にも頻々と登場します。一昔前までの神経生理学の知見は、その研究技法はさておき、研究成果を解説することは容易でした。ある心理機能を司っている、あるいはそれに関与していると考えられる脳の部位や器官の名をあげるという“静止画”を提示すればよかったからです。ところが最近では、そのようなスタティックな同定法が通用しなくなり、それに代わって、時・空間的拡がりをもったダイナミックなパターンとして捉える姿勢が広まりつつあります。単純・素朴な研究段階から一段抜け出た高い次元への発展といえましょう。心理学でも同様の展開が芽生えつつあります。わが図学部の発展を予感させる鼻高々な動向です。

しかしながら、このようなダイナミックなパターンを表現するためには、ひょっとすると、もはや図学部の手に負えない式学部的道具建てを必要とするのかもしれない。ダイナミックなパターンの図表象には、式的展開が不可欠かもしれない。いったんひるんでしまうと、何もかもが悲観的に見えてきます。図学部は、文学部と式学部の間にあって、両睨みのよい位置を占めているように高を括っていましたが、実はどっちつかずの中途半端な立場なのかもしれない。式学部も文学部も、式と文という形こそ違え、論理だけを便りに議論を組み立てているのに引き比べ、わが図学部では、感覚的・直観的なプリミティブな“絵”にたよって議論している。悲喜こもごもにこんなことを考え巡らせました。

すっかり忘れていましたが、私はいま、総合情報処理センターの広報原稿に取り組んでいるのでした。そこで、“両睨み”のわが図学部が当センターをどのように享受しているのかについて記しておきましょう。その本命利用は、実験や調査で集めた膨大なデータをリーズナブルに集約し、質的レベルに変身させるための利用です。SASやアナリストなどという統計パッケージの活用がこれに当るでしょう。図（グラフ）に表された量の違いを有意差検定というフィルターを通して質的差異に押し進める量-質転換の錬金術です。

さて、両睨みの一方の顔、文学部に向かっては、コンピュータ利用に関しては一日の長のある図学部スタッフとして、一言、申し述べておきたいことがあります。それは、情報コミュニケーションの“日常化”現象です。ここでいう“日常化”とは、文献などの情報検索を誰もが行うようになってきたという意味ではなく、使わない人はまったく使わないが、使う人にとっては利用範囲と頻度がますます広がって、いろいろな用途に日常的に使うようになりつつあることを指しています。経済的には、大学にいる限り、私たちは極めて安くあるいは無料で手軽に情報利用の恩恵を受けることができ

ます。そして、利用技術の習得に関しても、本学の総合情報処理センターは（その体制が整っているかどうかは私には判断を下す見識はありませんが）、ありがたいことに「使える人だけ使ってください」という姿勢ではなく（規模の大きな大学ではとかくありがちなことです）、優しく丁寧に教えてもらえるため（牽制球!）、よく解っていなくても使わせてもらえます。最近では、文学部や工学部の人たちの扱う情報は、書物・論文などの文献がらみのものに留まらず、電子メールと称する個別的・利便的・利便的情報などを含め、われわれの研究・教育・雑用に価値ある多様なものになってきています。価値ある多様な情報の受信と発信ができてしまうため、使い始めている人の利用形態はどんどん日常化してゆく。それに対し、試しに使ってみるといふ一線を越えない人にとっては、当センターの存在はいまなお無に等しい。まさに、コンピューター、“1”か“0”かの悉皆的世界です。いったん“1”の世界に迷い込めば、今度は逆に使い過ぎに注意するのみです。近い将来、使い方の習得にほとんどエネルギーを投入しなくてもよい“人に優しくかつ易しい”、すなわち出来のよいマン＝マシン・インターフェイスを備えたコンピューターの時代がくるのか、それとも努力して勉強することなどためらっておれないくらい文・工学部人にとっても必要不可欠な道具となる時代がくるか、いずれかであることでしょう。願わくば、前者であってほしいと思います。